イメージの諸様相

生野金三

I　はじめに

イメージをめぐってその様相が問題にされる時，従来から今日に至るまで，発生と発達からのアプローチは極めて希薄であったことが指摘できる。「イメージ化の○○」といった際には，「イメージ」の概念・機能といったことに対しての吟味はなされてきたと思うが，人間の成長過程におけるイメージの位置づけということになると十分メスが入れられているとは言い難い。イメージが人間の存在全体に関わり，行動の導き手であると考える時，イメージの諸相を探るに当たっては，人間の成長過程におけるイメージの位置を検討することが前提となる。そして，更に，そこでのイメージの様相を具に検討すべきであると考える。

以上のことを念頭に置きながら，以下，イメージの諸様相について考察する。

II　イメージの発生と位置づけ

イメージに関して最も体系的な追求を行っているのは，スイスの心理学者ピアジェ(J. Piaget)であると言われている。現代教育の研究と実践に多大の影響を与えているアメリカの心理学者ブルーナー（J. Bruner）もピアジェを下敷にして，representationの考察をしているほどである。したがって，ここでピアジェの発生的・発達的なイメージの様相を探ることは，極めて価値があると考える。

ピアジェはイメージを心像（image mentale）といった言葉でその概念を捉え，それを思考の発達段階の中で位置づけている。イメージの位置づけは，「表象的思考段階」の「前操作的段階」であり，これが更に細分された「前概念的思考期」（象徴的思考期）[1]と「直観的思考期」[2]とに関わっている。図1でも分かるように，「前操作的段階」に先立つ「感覚運動的段階」[3]と後続する「具体的操作期」[4]ともイメージが深い関わりを持っていることは言うに及ばない。

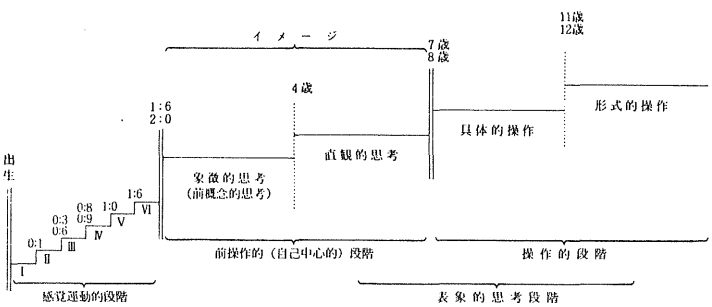


図1　ピアジェの発達段階

イメージの位置づけは上述した通りであるが，そこでの表象的思考との関わりを簡約すれば，表象作用を営むのがイメージであるということである。つまり，表象体系を支える骨格を形成する一つの要素がイメージであるということである。

さて，次にイメージの起源について触れることにする。ピアジェはイメージの起源を「模倣」に見出している。ピアジェはこの「模倣」を感覚運動的段階の最も特徴的な点として捉え，これが表象的思考にいかに強く影響を及ぼすかを乳児の行動の綿密な観察を通して明確にしている。ピアジェによれば，「模倣」そのものの発達は，生まれながらに持っている単なる反射行動による模倣の準備段階（図１，感覚運動的段階のⅠ）に始まり，同化と調節とが分化し，それらが補い合って働くといった直接模倣を経て，その場には存在しないモデルが再現できる延滞模倣（延滞模倣が可能となるためには頭の中でモデルを思い浮かべ，そのモデルに対して調節が行えなければならない。したがって，延滞模倣ではモデルを思い浮かべることが前提となる。これは図1の「感覚運動的段階」のⅥに当たるが，表象的思考段階への移行期であると解釈することもできる。）に至る六つの段階を経るとしている。第六段階の延滞模倣が可能となる時期に至ってイメージと呼称し得るものが見られる。第六段階になると，頭の中で模倣を行うことができるようになる。つまり，模倣が内化されてくるのである。内化された模倣とは，頭の中で対象や活動を再現することである。それはイメージというような形をとるのである。イメージを媒介として，過去に経験したが現在眼前に存在しないものでも模倣することができるようになる。こうした状況は，感覚運動的行為のシエマ（schéma）が内化していって顕在的で直接的な模倣を押え，ある程度の時間が経過した後に模倣行為として再現していると考える。ピアジェがイメージと呼び得ると言及しているのは，模倣が内化されたこと，つまり，内在化された模倣のことを称して言っているのである。したがって，ここに延滞模倣もやはりイメージの働きを前提とするものであることを見ることができる。

また，この頃になると，頭の中に何かを思い浮かべ，それに対してとるのと同じ行動をそれと異なった対象に行うといった象徴的遊びの徴候が見られるのである。この象徴的遊びは，次の段階の象徴的思考（能記と所記とが分化しているが，両者の間には類似関係が認められる。例えば所記 ――表されるもの ――とは異なった能記 ――表すもの ――によって所記を表象する働き。）へと発達するのである。ひっきよう模倣の発達過程が象徴機能の成立過程であり，イメージとして模倣が内化されて，一応のベンチマークに達するのである。

ブルーナーは，思考を媒介とする表象として，動作的（inactive），映像的（iconic），象徴的（symbolic）の三つの体系をあげている。これらの三者はそれぞれユニークな仕方で表象作用を営み人間の精神生活のそれぞれの異なった時期にその特徴を発揮すると認めている。つまり，人間の発達過程における表象体系として捉えているのである。ブルーナーは，イメージに基づく表象作用を映像的表象作用として位置づけ，それは「動作的表象」から「象徴的表象」に至る中間段階に位置し，幼児期における認知体制の中核として捉えている。「映像的表象」に先立つ「動作的表象」は，過去の事象が刻印され，持続するようになった「習慣的」パターンなのであり，[5] それ

はある程度の転移可能性を持った習慣的パターンなのである。これは動作による認知が大きなウェイトを持っているということであるから，ピアジェの発達段階の「感覚運動的段階」に相当していると考える。しかし，このような捉え方をすると疑問が残る。つまり，行動によって認知する時期を「表象的思考段階」でなく，その先立つ段階であると捉えているピアジェの立場とを異にし，ブルーナーは，行動によって認知する時期を表象体系の初期の段階の「動作的表象」の時期と捉えていることである。したがって，ピアジェの立場に立つ時，動作的表象と呼ぶものが，果たして表象と呼べるかという問題が出てくるのは当然である。それは，動作自体が果たしてそれ自身を超越したものを表示し，表象し得るかということが問題となるからである。この問題に対しては，先に述べた「動作的表象」は，ある程度の転移性を有した習慣的パターンであるということから説明が可能である。最初はある目的を果たすために，感覚運動的活動を使用するにすぎなかった習慣的パターンは，やがて「代行物」を全体として，行為を破壊することなく取り入れるようになるということからである。ブルーナーの「動作的表象」の中には「置き換え」「代行」といったようなことが内包されていると捉えることができる。ひっきょう行動が主体となっているブルーナーの「動作的表象」は，ピアジェの捉えている「感覚運動的段階」のⅥに位置していると考えることができる。それは，両者の「動作的表象」と「感覚運動的段階」との起源を探れば明瞭である。ブルーナーは，「動作的表象」の起源は「再求心作用」[6]の中に見出すとしている。ここでいう再求心性とは，感覚に基づき惹起した運動によって組織的に惹き起こされる神経興奮をいうのである。つまり，運動に伴う感覚的フィードバックのことである。ピアジェもブルーナーと同じような立場で捉え，それは，「感覚運動的段階」の初期に見られる。例えば，生まれた許りの赤ん坊が乳首に触れると吸いつくという反射的行動でその様相の説明が可能である。赤ん坊は乳首が頬に触れると直ぐ乳首を探すようになる。これは，吸うといった反射的シエマが修正されたことを示すものである。乳首に触れた際に受身的に働いていた吸うシエマが，積極的に乳首を求めて吸うといったように，その適応される状況が変化したのである。一方，ここには吸うシエマの練習そのものが，更に吸うことを誘い，そうしてそのシエマが強固になっていくといったように同化の働きを見るのである。ここには，ブルーナーが捉えている再求心性を認めることができるであろう。

ブルーナーの場合もピアジェと同様にイメージの起源を主に行動で認知する時期にあると考えることができる。そこでの行動の特徴としては，「置き換え」「代行」といったようなことが認められるが，これはピアジェの言及している延滞模倣に他ならない。それは，人間が技巧を要する道真を使用する時に，例えば，鉋を忘れた大工は必要ならばノミででも，ポケットナイフででも代用することができる，といった行動からしても認知できよう。鉋を忘れた瞬間においては，以前に鉋を使用していた時のモデルを頭の中に思い浮かべ，そのモデルに対して調節を行っているのである。

ブルーナーのイメージの起源は，「動作的表象」にあることが認知できるが，後続する「映像的表象」「象徴的表象」の相互関連について，「……動作系による表象が，象徴的活動を導き支える

……。[7]」「……イメージもまた，象徴的機能の性質を担い得るのである。……。[8]」「……象徴的表象における進歩も，それ以前のイメージ活動によって確立され，基盤に頼つているのである。……。[9]」とし，更に，「……イメージによって保存する働きが，早期の動作的表象による融通性を欠いた系列的表象作用と，……児童後期の言語性が浸透した表象作用との間のギャップを橋渡しする。……。[10]」と述べている。ここには，三者それぞれ独自の営みを認めると同時に，系統性も十分認めることができよう。

Ⅲ　イメージの本質

イメージ（image）という日本語化された英語で呼称されているこの言葉の語源はラテン語のimago（imá:go:）にあり，次のような訳語が当てられている。「似姿」「絵」「像」「胸像」「塑像」等のような具象的な面が一つのグループ，次に，「心中に形成された形象」「概念」「思想」「想像」「類似」「比較」「形態」「外観」「映像」等のような抽象的意味のグループ，第三に「反響」「こだま」，第四は「幽霊」等である。[11] このようにイメージという言葉の意味は極めて多岐に渡っているため，我々が日常頻繁に使用しているイメージの概念は，上述した意味の一部をイメージとして解釈し，それを使用している場合が多いのである。

以上のことを念頭に置く時，イメージの一般的な定義をすることは極めて困難なことであるかのように思えるが，ここでは「像」という意味を基本にしながら，その様相を探ることにする。

イメージの様相を探るに当たっては，まず，ピアジェのイメージ論から考察する。

ピアジェにおいては，イメージ（心像）は感覚運動的シエマから生ずる模倣の内化されたものであり，知覚そのものの残滓ではなく知覚的活動の産物なのである。それは，感覚運動的シエマの調節作用（頭の中に思い浮かべたモデルに合わせて自分の行動を調節すること。）としての能力的模写であり，知覚対象の単なる痕跡，感覚的残留物ではない。感覚運動的な認知が内面化され始めて，イメージが発生し，それに基づく象徴的行動が開始されるのである。ここで言及している内面化された姿とは，単なる外物の模像ではない。イメージは対象が受動的に引き写されるものではなく，子供が対象に対して主体的に働きかけ，それを自己の内に取り入れ作り上げたものであって，そこでは感覚や知覚は素材を提供しているに過ぎないのである。ここにはイメージの世界の成立を見ることができるが，それは内的世界の成立に他ならない。上述したことからでも分かるように，イメージは，外界の情報を個々人の内なる世界によって照合したりすることであることから，主体が構成した産物であるとも言える。このようにイメージは，主体による内的世界の成立であるために，個性的であり，かつ，恣意的であると言われるのだろう。

ブルーナーは，イメージのこうした特徴について次のように述べている。ブルーナーは映像的表象作用（イメージに基づく表象作用）段階においては，「自分の出交わしている状況を整理し，秩序づけようとする場合，対象の知覚的情報を手掛りにしやすいし，それを照合するに当たっても自分の内のイメージに基づく直観的判断が下されるため，直接には『見えない』特徴，知覚を通しては直接に『語りかけてくれない』特徴，つまり，表面的な『見え』の下に隠されているよ

うな『基底的』な構造を捉えるには至らない。[12]」としている。この段階では，対象の表面的な特徴に簡単に左右されることが極めて大であるので，不安定であるし，自己中心的であると言える。しかし，ブルーナーは対象を表面的見かけによって決めてかかるのが，イメージの段階(映像的表象段階)にある子供の思考の中心的な性質であるとしながらも，イメージ活動は「理論的」操作の先駆けであるとし，その重要性を認知しているのである。

上述したようにイメージが内在化された模倣であるなら，原則として自分が理解しているもの，あるいは理解しつつあるものしか模倣しないのかというような疑問が生じてくる。このことに関しては，後述する「イメージの分類」の部分に譲ることにして，まず，イメージに最も直接的な関わりをもつ，象徴的思考について考察する。このことは，ピアジェが「言語という記号の体系が使いこなせるためには，まず，もっと一般的な象徴機能が獲得されていなければならない。[13]」と言及していることからしても避けて通るわけにはいかない問題である。因に，イメージと象徴との関連について，河合隼雄はエングの研究に当たり，「心像（イメージ）の研究は，必然的に象徴（symbol）の研究へと向わしめた。[14]」としている。

1　イメージと象徴

内在化した模倣がイメージであり，それに基づいて象徴的行動が開始されるということは，イメージを媒介として象徴的行動が始まるということであると同時に，イメージなしには象徴は成立し得ないということであろう。このようなことから考えると，イメージは本質的に象徴的機能を持っているといえよう。

例えば，「子供がブロックを自動車に見立てる。」「小石を飴玉に見立てる。」といった象徴的遊びについて考えてみればこのことが明確になるであろう。ここにおいては，子供はあるものを，それとは本来全く異なったものに見立て，それを意味づける働きを示している。つまり，小石は単なる石ではなく，飴玉の象徴記号として用いられているのである。小石を飴玉の象徴と扱っている時の子供の頭の中は，イメージの形として，頭の中に再現されているものである。したがって，実際には飴玉でない小石も恰もそうであるかのように扱うことができるのである。言語の使用の場合にも，最初の段階においてはイメージの働きが前提となると言われている。

ピアジェは，このような象徴機能について，「所記とは異なった能記によって，所記を表象する働きである。[15]」と述べている。ここにおいては，所記と能記とは分化しているものの，所記と能記の間には類似関係が認められるのである。所記は表されるもので，始めのうちは子供が実際に行うことのできる活動や対象がこれに当たり，能記の方は，所記を表すものである。

先の象徴的遊びでもイメージが能記としての役割を果たし，この場合のイメージは，象徴としての働きであって，サインを捉えるまでには至っていない。それは，子供が頭の中で思い浮かべるイメージは，全く恣意的なものであって，個々の対象の特性を抽象して形成されたものではないからである。つまり，「飴玉」という言葉やサインは，飴玉の特徴を抽象して構成された飴玉の一般的クラスを表しているのであって，個々の飴玉の心像とはほとんど関係がないからである。

したがって，象徴的遊びにおいては，一般的クラスは存在していないと考えることができる。ここでは，各飴玉のイメージがそれぞれの飴玉を表しているのである。そして，飴玉全体を表すためには，飴玉のイメージのうち，ある特殊なものが典型として用いられる。ある特殊な飴玉のイメージは，単なる飴玉のイメージにととまらず，個々の飴玉のイメージ全体を代表するものとして利用されているのである。

イメージが象徴の働きとして可能になるに従って，サイン使用ができるようになってくる。つまり，社会的サインとしての言語が獲得されてくるということである。社会的サインとしての言語への移行段階に当たるのが，セミ・サインと呼称される言語的シエマである。言語的シエマについて，ピアジェは次のように述べている。「ジャクリーンは，……彼女は犬をさして，『ワンワン』といったが，その後，このことばは犬に似た動物に適用されるようになり，さらには，最初に犬をみてワンワンといったバルコニーからみたすべて ——動物・車・人など ——に適用されるようになった。[16]」「ワンワン」といった言語的シエマは，感覚運動的シエマではないが，概念的シエマにもほど遠いものである。この言葉は，単なる進行中の活動とか，知覚に伴って発せられたわけではない。確かにこの言葉は何かを代表しているのである。つまり，何かを意味しているのである。したがって，子供は全くでたらめに何に対してでも言語的シエマを適用しているわけではないのである。子供なりに主観的ではあるが，そこに類似性を認めたものを一括して言語的シエマを適用しているのである。ここで発している言語は，対象のある属性に基づいて形成されたクラスを表していると考えられる。ここにおいての言葉は，まだ擬声語であったり，成人の言語の模倣であったりするが，全く個人的なイメージではなく，社会的言語が使用されていると解することができる。この言語的シエマが，間もなく概念的シエマへと進化するのである。最初の言語的シエマが獲得されるや否や，子供達は急速に喋るようになり，そして，言葉は現在における対象や活動の状態を表すだけでなく，過去の活動も表すことができるようになる。こうして，言語は，活動から全く離れて，活動を記述するサインとして働き始める。つまり，イメージによって象徴化されたものが言語化されたサインに変換されていくのである。そして，やがて概念的シエマへ達していくのである。

イメージと象徴との関わりについて，発達的立場から考察してきた。上述したように，象徴が成立するためには，イメージが不可欠の条件であると同時に，それが母胎となって働いていることが認められる。そして，イメージによって象徴化されたものは，更に言語化されたサインへの発展性を帯びていることも認められる。

ピアジェと同様にイメージ（心像）と象徴との相互関連に触れ，それらの重要性を指摘しているのが，スイスの精神医学者ユング（C. G. Jung）である。ユングはイメージと象徴との関わりについて，「……心像のもつ生命力について述べ，それが新しいものを生み出す母胎であることを指摘したが，その創造的な面が，最も顕著に認められるものが，象徴である。[17]」としている。ユングが捉えている心像は，ピアジェの言及しているような外的客体の模倣という意味とは多少ニュアンスを異にするが，「……心の内的な活動に基づくもので，……内的な像として，外的事実とは区

別して，その個人に受け取られるものである。……。」[18]としている。ユングは，「心の内的な活動に基づくもの」と言っているが，これは外的事実に直接的に影響されるものではなく，飽くまでも個々人に主体的に受け取られるものであるということである。このようにして受け取られたイメージは，普通，外的・現実的な価値を持ち得ないように思える。しかし，このことに対して，ユングは，「……それは大きい内的価値を有している場合があり，外的なものとも微妙なつながりを有しているものである。」[19]と述べている。ここにおいては，ユングもピアジェと同様に外的現実との関わりを認めているように思う。ひっきようユングは，個々人の主体性を基に考えるべきであるということを強調したかったにすぎないのである。個々人の内的な活動に基づくイメージについて，ユングは，生命力を有し，新しいものを生み出してゆく創造力へと繋がるとしている。換言すれば，イメージは，我々人間の理念の生まれる母胎であり，我々が意識的に思考する時，いろいろな概念がその思考の要素として，それらを組み立ててゆくのであるが，その概念そのものは，何らかのイメージを母胎として持ち，それによって無意識の層に繋がっているのである。

イメージの持つ生命力に支えられ，創造的な面が最も顕著に表現されるものが象徴であるとユングは捉えている。ここにおいての象徴は単なる既知のものの代表として捉えているのではなく，比較的未知なものを表現しようとして生じた最良のもの，つまり，これ以上適切な表現法が考えられないというように苦慮して表現したものである。要するに，象徴は「我々の意識の体系は明確な概念によって組み立てられ，それ自身の一つのまとまりを持っているものではあるが，それがつねに生命力に満ち，発展してゆくためには，心の中のより深い部分とつながりが，基礎づけられていることが必要である。」[20]ということが踏まえられた表現であるといえる。そして，更に，イメージと象徴との関わりについて，「心像は，自我に対して心のより深い部分から語りかけられる言葉であり，これによって自我が心の深い部分との絆を保つことができると考えられる。そして，その内容が高い統合性と創造性を持ち，他のものでは代用し難い唯一の表現として生じるときを象徴ということができる。」[21]と述べ，象徴の母胎を心像に置いている。

先に，「これ以上適切な表現法が考えられないというように苦慮して表現したものが象徴」として捉えたが，これは，個々の独特の表現法であるにも拘らず，相手への伝達ということを念頭に置く時，単なる記号としてではなく，社会的サインとしての機能を果たしているように思う。このようにユングの象徴を捉えることが可能ならば，これは，ピアジェのセミ・サインを発展させたものでと解することができる。

2　イメージの分類

イメージが内的な活動に基づく模像であると捉える時，それは，一見我々自身の内の生理的，また，心理的な内発的原因によってみ誘発されているように思えるかもしれないが，決してそうではない。内発的原因に基づくイメージであることは言及するまでもないが，それは外像とも何らかの関わりを持っている。つまり，外像と直接的・間接的に関係を持ち得ないイメージは存在しないのである。したがって，イメージの誘発の一要素として，我々の感覚の対象である外像も

含まれることは明瞭である。

このように内的・外的の刺激を媒介としてイメージが形成されることを念頭に置く時，その内容が多岐に渡ることは言うに及ばない。ここでは，ピアジェの分類を基にして，その内容を考察する。

ピアジェは，イメージを四つの観点から分類している。つまり，イメージは再生的か予想的か，イメージは対象が静的か動的か変換するか，内在化の程度が直後再生的か遅延再生的か，イメージが変換の結果のみに依存するか過程にも依存するか，という点からである。

まず，最初の二分法は，イメージを，既知の対象や出来事を喚起するような再生的なイメージ（R）と，運動であれ，変形であれ，あるいはその帰結または結果であれ，以前に知覚されなかった出来事を形象的に想像することによってできる予想的イメージ（A）とに分ける。この区分に対して，ピアジェは，「原則は単純であるとはいえ，実際に適用する段になると，それほど簡単ではない。その理由の第一に，被験者がそれ以前にすでに知覚したものを確定できないからであり，第二に，何よりも運動の形式や，おそらく静止した外形の変形までも再生することは，少なくともその実行過程で，ある種の予想を含むことはありえるからである。[22]」と言及している。確かに単純なものを再生することでさえ，既にある一種の予想的図式が介入して来ることを認めることができる。こうしてみると，この分類は単に複雑にしているかのように観取するが，これに対してピアジェは，「……この複雑さはそれ自体有益なのであって，それは一度に次のような問題を提起してくれるからである。[23]」と述べている。その問題とは，イメージとは知覚の直接的延長にすぎないのかどうか，あるいはイメージは能動的な内在的模倣によって発生するものなのかどうかを確定することである。この解は言うまでもなく後者であると実験によって捉えている。さて，ここで両者の関係を考えることにするが，ピアジェは，この関係について，再生的イメージは予想的イメージを行わせることができるとしている。それは，再生的イメージそのものに予想の要素を賦与しているからであると捉えている。このように過去において経験したことのない対象を予想することが可能になるのは，ピアジェが捉えているイメージの範囲の後に位置している。つまり，具体的操作期（図１の７・８歳～11・12歳の間）に当たる。ピアジェは，論理的思考操作の段階に至って，イメージも発達し，そして，それを媒介として，社会的サインが確かになると同時に，概念化が進んでくると捉えている。したがって，ここでの分類は，発生論的問題を正しく提起するように導くという意味に他ならない。

先の二分法を踏襲して，再生的イメージをその内容と内在化の度合という二つの基準によって分類している。まず，内容に関しては，不動の物体か外形かを対象とする場合とイメージが形象的に運動を喚起する場合と既知の変形を形象的にイメージする場合との三者に区分している。つまり，静止の再生的イメージ（ＲＳ）・運動の再生的イメージ（ＲＣ）・変形の再生的イメージ（ＲＴ）と分類しているのである。それらのイメージは何れも対象を前にしての模写に関わっているので，直後のイメージであると考えることができる。先に再生的イメージは実行予想を行わせることが可能であることを指摘した。ここにおいても再生的イメージが予想的な面の介在を前提

としていることは明白なことである。これに関して，ピアジェも大部分の場合において再生的イメージのＲＣ、またはＲＴと予想的イメージのＡＣ，またはＡＴとの間には如何なる本質的相違も，如何なる根本的断絶も存在していないとしている。

再生的イメージは，静止・運動・変形の面から分類したが，ピアジェは，更に，その内在化の度合によって分類している。内在化の度合に就いては，「……一方では，再生行為（Ｒ・ＲＤまたはＲＧ）の多少とも直接的（Ｉ）な性格に，あるいは延期された（Ⅱ）性格によって変わり，他方では，再生行為が前提とする運動の内在化によって変わる。……。[24]」としている。すなわち，ピアジェは，内在化はイメージそれ自体（Ｒ）の場合には明白であり，模倣動作（ＲＧ)の場合は，内在化はゼロであるが，イメージが伴うことは有り得るとし，更に，描画（ＲＤ）の場合には，内在化は必然的に生じるとしている。ここに様々の度合で介入してくるのを見出せるが，ピアジェは直後の再生的イメージ（ＲＩ）と延期された再生的イメージ（ＲⅡ・ＲＧⅡ・ＲＤⅡ）とに区別している。ここでの延期された再生的イメージとは，モデル消失直後のイメージ，あるいはもっと大きな時間間隔で延期されたイメージのことである。一方，直後のイメージであるが，これは決して純粋の状態では存在していないことを考慮に入れておく必要がある。それは動作による再生，あるいは描画による再生の中にのみ統合されているからである。イメージはそれだけを取り出すことが不可能であることを考慮する時，このことは当然であろう。

次に，第四の観点について考察する。ここでは，「具体的操作期」に発達が著しい予想的イメージを取り上げる。予想的イメージは，静止の予想的イメージではなく，運動の予想的イメージ(AC)と変形の予想的イメージ（ＡＴ）とを区別するだけである。その理由として，ピアジェは，「……子どもが自分の知らない静的状態を心像によって予想しようとするのは，たとえば，一本の管を空中に１８０°転回させて，はじめの順序に対して管の赤と青の両端の順序が入れかわり，それによって最終的な管の水平上の位置を，心像によって予想するためには，子供は，その状態が由って来るところの運動や変形を考慮に入れなければならないだろう。……。[25]」としている。この区別は発生論的観点からは極めて重要であると考える。具体的には，変形の結果，もしくは，その所産（Ｐ）のみを対象とする変形のイメージ（予想的イメージであれ，あるいは単なる再生的イメージであれ）ＲＴＰ，またはＡＴＰと変更（Ｍ）の結果だけでなく，Ｍ自体を対象とする変形のイメージＲＴＭ，またはＡＴＭとを区別することである。実際に子供が変形の結果を予想できるためには，その変形を変形として十分考慮に入れなければならないけれども，子供が変形Ｍを細部に至るまで想像できるとは限らない。したがって，イメージＡＴＰはイメージＡＴＭより上位水準にあると考える。イメージＡＴＰは予想的イメージとはいえ，静止状態の予想とはいえないように思う。

以上，四つの観点に従って述べてきたが，それを整理すると表１（ピアジェの分類による。)のようになる。

表1　イメージの分類　26)

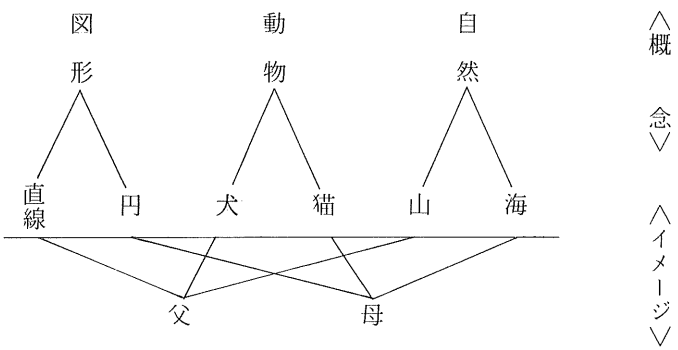
	直後再生的（I） 遅延再生的（II）		所産（P）または変化（M）を対象とする。	
再生的（R）				
静止（RS）	RSI	RSII		
運動（RC）	RCI	RCII	RCP	RCM
変形（RT）	RTI	RTII	RTP	RTM
予想的（A）				
運動（AC）			ACP	ACM
変形（AT）			ATP	ATM

3　イメージの意義

上述したことを踏襲して，人間の心の中に存在するイメージの意義について考察する。イメージの意義を考察するに当たっては，イメージの意味の把握が困難であるとしながらも，イメージが我々に対して持つ意義の重要さを指摘しているユングの考えを基にする。

ユングは，イメージについて，「……われわれの理念の生まれる母胎である。……。」[27]として，その重要性を述べている。そして，我々人間が意識的に思考する際に不可欠の要素である概念そのものは，何らかのイメージを母胎として持ち，それによって無意識の層に繋がっていると捉える。この際，概念のレベルにおける規則とイメージの中における秩序とが同一でなく，然も，交錯しているため，種々の問題が生じてくる。例えば，図2で概念的に全く異るものとして分類されているものが，イメージの世界では，父のイメージ，母のイメージとして統合されている場合を考えれば明白である。イメージの世界の中では，思考の対象としての属性と混合し，意識の世界での秩序を破壊し，何らかのイメージとして具象化されるのである。このように一見非合理的なイメージが具体性を持って，より高いレベルの理念の母胎として存在しており，これを基にして一つの考えが構築されることもある。したがって，イメージは強い心的エネルギーを内包しているといえる。

図2　28)



次は，第二の特徴である集約性について考察する。ここにおいても把握の困難さは十分認められるのである。先の具象性の部分で述べたことからしても，イメージは単純でないことは十分認知できよう。様々の素材の複合体であるものの，それ自身独立した意義を持っている。ユングは，イメージが表現するものは，「…無意識内の内容全部などというものではなく，ちょうどそのときに一つの布置を形成した内容の表現である。このような布置は，一方では，無意識からの所産であると同時に，他方，そのときの無意識の状態にも依存している。」[29]と述べている。これは，言ってみれば，心の全体的な状況の集約的表現ということである。ここにおいては，イメージが多くの事象を集約して表現していることが認められる。これらのものは総て，個々人の過去と密接に繋がりを持っていると同時に，現在の心の状況をありありと伝達していると考える。

イメージの具象性・集約性といった特徴に就いて考察したが，次にイメージの直接性という点について触れる。ユングは，感情や思考等が内包された言葉を述べる際には，相手の心に届くように，あるいは相手が内的に体験できるように働きかけるべきであるとしている。それは，心，つまり，イメージから直接得られるものの方がはるかに豊かであるからである。こうして得られたものは，人の行動の起爆材にもなるのである。イメージはこのように強力なものであるが，時には，非常に難解であったり，明確さを欠いていたり，多義的に感じられたりすることもある。それ故に，我々はイメージより直接得たものから，具象性を払拭し，明確さを与えて，理念にまで高める努力をするのである。しかしながら，明確な概念のみを取り扱い過ぎて，背後にあるイメージとの関連性を忘れてしまうと，概念そのものは味のないものになってしまう。逆にイメージの持つ強力な直接性に打たれ，それを概念として洗練する努力を払わずに，イメージそのものを表現したとしても，それは全く伝達不可能なものにすぎない。これらのことについて，ユングは次のように比喩している。前者は，「……概念だけの世界に住み始めると，その概念は水を断たれた植物のようになり，……。」[30]と述べ，後者は，「……これは生木で家を構築したように，だんだんひずみが生じてくるのをさけることができない。」[31]と述べている。ここにおいては，両者の関連性がいかに強固なものかを見出すことができる。こうした関連性を重視することによって，生命力を有するイメージが，新しいものを生み出す創造力へ繋がっていくのであると考える。

Ⅳ　おわりに

本論は表題に示した如く，イメージの諸様相について論究してきた。換言すれば，イメージを発生論的立場から探ると同時に，そこでの特徴を分類し，そして，イメージの意義について考察してきた。イメージが人間の存在全体に関わり，人間の行動の導き手であることを念頭に置くとき，イメージそのものが人間全体の中で果たす役割を捉えることは，イメージを媒介とした教育を思考する時不可避の作業であることは言うに及ばない。このことを踏まえて，更に，具体的な場においてイメージ形成のあり様を検討することが課題となる。このことは稿を改めて論究していくことにする。

＜ 注 ＞

1）表象的思考段階が始まり，感覚運動的な認知が内面化され始めてイメージが発生し，それに基づく象徴的行動が開始される時期。『児童心理学』藤永保編　有斐閣　p. 250

2）概念化が進み，事物を分類したり，関連づけたりすることも進歩してくるが，その際の推理や判断がいまだ直観作用に依存している時期。注１　p. 251

3）子供が生まれながらに持っている反射的な行動を基礎にして，新しいより適切な，より効果的な適応行動を発達させる時期。『ピアジェの発達心理学』波多野完治編　国土社　p. 34

4）具体的に理解できる範囲のものに関しては，論理的な操作によって思考したり，推理したりすることが可能な時期。注１　p. 251

5）『ブルーナー　認識能力の生長　上』J. ブルーナー／岡本夏木他訳　明治図書　p. 35

6）注５　p. 42

7）注５　p. 36

8）注５　p. 61

9）注５　p. 58

10）注５　p. 58

11）『わかる授業　特集イメージの追求』高橋金三郎・細谷純編　明治図書　p. 12

12）注１　p. 257

13）注３　p. 55

14）『ユング心理学入門』　河合隼雄　培風館　p. 114

15）注14　p. 56

16）注14　p. 65

17）注14　p. 121

18）注14　p. 115

19）注14　p. 115

20）注14　p. 132

21）注14　p. 132

22）『心像の発達心理学』　J. ピアジェ．B. インヘルダー／久米博他訳　国土社　p. 19

23）注22　p. 19

24）注22　p. 21

25）注22　p. 22

26）注22　p. 23

27）注14　p. 115

28）注14　p. 115

29）注14　p. 117

30）注14　p. 119

31）注14　p. 120

参考文献

1　『ザ・イメージ』　K。E.ボウルディング／大川信明訳　誠信書房

2　『イメージと人間』　藤岡喜愛　日本放送出版協会

3　『サルトル全集第12巻　想像力の問題』　J.P.サルトル／平井啓之訳　人文書院

4　『イメージの心理学』　飽戸弘　潮新書

5　『企業イメージ』　日本経済新聞企画調査部編　日経新書

6　『東京学芸大学紀要　第１部門　教育科学　第23集』　東京学芸大学紀要出版委員会

7　『知能の心理学』　J。ピアジェ／波多野完治他訳　みすず書房

8　『模倣の心理学』　J.ピアジェ／大伴茂訳　黎明書房

9　『表象の心理学』　J.ピアジェ／大伴茂訳　黎明書房

10　『教師のためのピアジェ入門』　G。ファース／岸本弘訳　明治図書

11　『イメージ　催眠シンポジアムⅡ』　成瀬悟策編　誠信書房

12　『現代教科教育学大系２　言語と人間』　倉沢栄吉・野地燭家編著　第一法規